

ユーラシアンホットライン

『音の回廊、東西擦弦楽器の出会い』

～ギジャック、馬頭琴、そしてヴァイオリン共鳴の音色～

公演迫る!! 是非お出で下さい。



前号でお知らせしましたように東京オペラシティ・近江楽堂で『音の回廊、東西擦弦楽器の出会い』公演を開催します。このほど、ヴァイオリン演奏に三木希生子さん・『結アンサンブル』コンサートマスターが決まりました。これで東西の擦弦楽器の一般演奏家による音の回廊、夢の共演が実現します。

公演まであと1ヶ月です。友人、知人をお誘い合わせの上、是非おいで下さい。

この企画は、中央アジアで広く演奏される楽器・ギジャックと、西に伝わって生まれたバイオリン、東で生まれた馬頭琴の三楽器の競演で擦弦の音の回廊を演出し、広い音域と豊かな音量、流麗で繊細な音色を楽しんでいただきます。また、擦弦楽器が中央アジアのオアシス都市帯を発祥に、どんな風に広がり変容していったのかを探るコンサートでもあります。擦弦楽器を通して民族や宗教、国家を超えた理解が広がることを願っています。

演奏はギジャックをウズベキスタン・ブハラから再来日のイスマトフさん、馬頭琴を著名な中国国家一级演奏家ライ・ハスロー（頼玉龍）さん、そして、ヴァイオリンは『結アンサンブル』コンサートマスターの三木希生子さんです。

日時：2002年10月8日(火) 18:30会場 19:00開演

会場：東京オペラシティ近江楽堂（京王新線初台駅下車）定員 100名 TEL 03-5353-6937

出演：イスマトフ（ギジャック）ライ・ハスロー（馬頭琴）三木希生子（ヴァイオリン）大野遼（司会・レクチャー）

チケット：前売り 3,000円 当日 3,500円 全席自由 送金方法：郵便振替で口座名ユーラシアンクラブ 口座番号 00190-7-877777 にご送金下さい。当日、払込金受領書をお持ち頂き、受付でチケットと引き換えます。

主催：『音の回廊 東西擦弦楽器の出会い』公演実行委員会、特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ

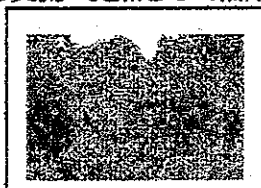
お問合せ先：ユーラシアンクラブ〒151-0053 渋谷区代々木2-13-2 第一広田ビル

TEL 03-5371-5548 E-MAIL PAF02266@mifty.ne.jp

シカチアリャン村の2箇所目の井戸改修完了

ユーラシアンクラブではこれまで、昨年10年間の紛争を決着し、住民管理で活用が可能になったシカチアリャン村外れのキャンプ（1.5ha）を、アムール流域の先住少数民族ナナイの自立の拠点・コミュニティキャンプおよび日本との交流拠点として使用するためクラブに「サポート委員会」（木野保幸委員長）を発足させ、募金活動をスタートさせるとともに、第一歩として村で2ヵ所目となる井戸の修理に取り組みました。

この夏、ナナイ、ウダゲ親睦旅行を実施、その際キャンプも視察、井戸の改修が完了し、地下百メートルの清冷な水が噴出しているのを確認しました。引き続き、この自然水の活用法を考え、このキャンプを整備し、管理し、村の発展と交流の拠点として活用する方向で検討を続けています。ご協力ありがとうございました。



左は改修された井戸



勢い良く噴出する水

<<特報>> 21世紀日露交流推進委員会発足で予備協議進む

—来年8月9日シカチアリャン民族芸能祭、自然と暮らしをテーマとした草の根交流国際会議そしてスポーツ交流を実施：サポート委員会を拡充して対応—

このほど現地視察後早々にサポート委員会を開催した結果、下記のような体制で、来年8月9日（国連の定めた先住民族の日）にナナイの民族村シカチアリャンで「シカチアリャン芸能祭」および草の根国際会議「ナラ林文化の自然と暮らし」を開催、スポーツ交流を開催する方向で合意、関係団体と予備的な正式な協議が始まりました。構想は下記の通りです。

実施の主体：「21世紀日露交流促進委員会」、日露交流協会、ユーラシアンクラブ、シカチアリャンサポート委員会等

趣 旨：来年2003年が、「ロシアにおける日本年」となった事を踏まえ、これにふさわしい事業の一つとして表題の実行委員会を発足させるとともに、将来の沿アムール・沿海交流の発展を視野に入れて交流促進の事業を検討実施する。実施日時は、8月9日（先住民族の日）をはさんだ数日間を考えています。

交流の内容：

①「シカチアリャン芸能祭」

星野 紘（東京文化財研究所名誉研究員）、品川 能正（劇作家、演出家）

出演者・団体 シカチアリャン民族アンサンブル

クラスニヤル民族アンサンブル

ワシユギ民族アンサンブル

中国ナナイ族イマカンの語り

下北の能舞（青森）

三匹獅子舞（新潟）

由紀さおり姉妹、さだまさし、元ちとせ等（交渉中もしくは候補）等、

共感アーティストのコンサート

②「草の根国際会議—ナラ林文化の自然と暮らし」

加藤 九祚（国立民族学博物館名誉教授/ユーラシアンクラブ名誉会長）

小林 達雄（國學院大學教授）等

③スポーツ交流

青少年サッカー交流

今後の皆様のご支援、プロジェクトへの参加をお待ちしています。

<アムール・沿海地方旅行—ナナイ・ウデゲの自然と暮らし>

ユーラシアンクラブは、8月中旬、10年あまり交流の続く日本海対岸の先住少数民族ナナイ、ウデゲとの親睦交流、自然と文化に触れるツアーを行ないました。以下は、参加者の寄稿です。

初めての出会い

野原 燦

その人の庭は、花がいっぱいだった。黄色い花、赤い花、花弁が沢山ある球形の巨大な花など、その夜私たちが着いたとき、あたりは真っ暗で、案内されて玄関にたどり着くわずかな時間に、闇の中から浮かび上がった花たちに私たちは歓迎された。中に入った私たちを待っていたのは料理だった。おとぎ話の熊だったら眼を見張っただろう、食卓の上には皿がいっぱい、皿の上には料理がいっぱいだった。私たちはさっそく食卓を囲んだ。私たち遠くから来た者たちは5人、それ以上の村人たちが食卓を囲んだ。時折、別の村人たちが顔をのぞかせる。ウォッカで乾杯。大野さんを中心に座は盛り上がる。言葉が分からないわたしは沈黙していたけれども暖かい雰囲気包まれていた。宴はいつまでも続くと思われた。たちねのナナイの村のバーバ・カーチャよ。わたしの祖母はもう亡いだから、バーバ・

カーチャはそれに次ぐ位置にながわたしの中で在りつづけるだろう。

数日後、私たちはウデゲの村から二艘の細長いボートに乗った。ビキン川を遡るのだ。乗船して間もなく、突然銃声が出た。グリーシャが水中の生物を撃った。続いてそのものはボートのすぐ近くまで泳いで来た。ひどく傷つき血みどろで。そのものはボートに這いのぼろうとし怖かった。グリーシャが至近距離からとどめを2発撃った。激しくもがいていたそれもようやく沈んでいった。水面を赤く染めて。私たちは森の王を殺したのだろうか。太古ウデゲの民は決して獣の名を呼ばず「殺す」とも言わなかったという。獣は単に食糧や狩猟の対象として捉えられることはなかった。おそらく存在するすべてが生き動いて連鎖しており、人は獣と強く結ばれている。その対等な関係

の中で神に近いものを祭ることもひとには許されているだけだ。そのものとはおおきなイノシシだった。そのものは一度沈みそしていくら探しても見つからなかった。一瞬の神の顕現とはいわない、だが一匹の獣より巨大なもののがそこを通り過ぎたのだ。

この旅行に誘われた時、「ナナイ・ウデグ」という名を始めて聞いた。知らないことは存在しないのだから正確には、知ら

ないとさえ言えない。私たちの近くに私たちの先祖に近い民族が居て、ロシア語をしゃべりそれでも少数民族としての自覚を失わずに生きている。彼らに接した後も、わたしには分からない。ナナイ、ウデグとは何か、民族の生とは何か。でもそれは、彼らのことが分からないだけではない。私たちは自分たちのことも分かっていないのだ。

擬制の“民族舞踊”

星野 紘 (東京文化財研究所名誉研究員)

世界各地で“民族舞踊”フェスティバルが盛んに催されているが、概念に忠実な“民族”の“舞踊”が登場することは稀である。これはほとんどがステージ舞踊として観客の好みに合うように改変されているからだ。本来は信仰行事の一次第として各地各民族の独自性を表現している。それぞれの多様な表現様式が欧米風のグローバルなスタイルに画一化されるのだ。その一潮流が、ロシア CIS、中国、北朝鮮など社会主義を謳歌してきた国々に顕著なロシア・バレエ風“民族舞踊”である。

他方、これを助長する層も存在するのでこの擬制がなかなか見えてこない。舞踊といえば西洋風バレエのことであり、音楽といえばピアノや交響楽のことであり、それ以外のジャンルの存在をしろもの、マイナーだよ！と思いついでいる人たちである。

ところが、歌舞伎舞踊や地唄舞、田舎の祭りでの

神楽や盆踊り等を日本の“民族舞踊”と命名する人がいる。日本族とか大和族が民族として認定されているわけではないのでこれは煮詰まらない概念である。もっとも私にはこの早とちりが、グローバルなスタイルに画一化されたものだけが“民族舞踊”なのではないという世界各地各民族の声なき声を代表しているように思えてならない。

今夏当クラブ主催の沿海州旅行に参加し、ナナイ族とウデグ族の村で“民族芸能”に接したが純粋の意味の“民族”の“舞踊”ではなかった。しかし、ナナイ族の“舞踊”の中で演じられた四つん這いになっての縄跳び、平面と美の縄跳びの場面は、けれん味のある技で面白かった。このような“遊戯”“や”競技“の表現は借り物の表現ではなかるう。各民族の子供や若者にこれをやらせたら、きっと嬉々としてやって見せてくれるのではないか。

雨のシカチアリヤン村

品川 能正 (脚本家演出家)

そば降る雨の中、犬は墓穴のそばに丸く固まると動かなくなった。亡くなった婦人の愛犬だったのだろうか。周囲を大勢の村人が取り囲んでいるにもかかわらず、かたくなに墓穴のそばを離れようとはしなかった。やがて棺が入り、墓の周囲を花が覆い隠すほど飾られてようやく犬は立ち上がった。そして私の方をよそ者を見るように一瞥すると、あつという間に森の中に消えた。その葬式は日本のそれとは大きく違い、誰かが進行役をつとめるでもなく、お別れの儀式を行うでもなく、肅々と進行した。雨は涙雨のように村人のすすり泣きと混じり振りつづけた。

大野氏に誘われて初めて訪れたシカチアリヤン村での1日目のことである。村人は直会の食事を口に、ウォッカを回し、雨の一日は暮れようとしていた。七十世帯、人口わずか三百人の村である。人の死は日常の中でも大きな出来事であるだろう。しかし、村人はあわてず、声をあげず、黙々と墓穴を掘り、土をかぶせ、記念写真を撮り、柩をつくり、雨の中を村へと帰って行った。

私は冷たい雨の中、村人に紛れ、不思議な感動の

中にいた。読経も葬儀屋もいない葬式。言ってしまうとただそれだけのことだが、人々は誰に指示されるわけでもなく村人として、知人友人として、人の死に直面していた。

東京の、ましてや高層マンションの一室で同じように亡くなったとしたら、どうだろうかと考えてみる。我々が失ったものは帰ってこないが、思い出することはできるだろう。日本に帰り数日が過ぎた今もあの墓穴の側で丸く固まった犬の何とも言いがたい悲しみの表情を忘れることができない。それは村人たちがそのものとも思えてくる。

今、来年この村で行われる予定の「日本、ロシア文化芸能フェスティバル」の準備をお手伝いしている。何としても成功させたいと思う気持ちの底にあるのは、我々が失ったものを思い出させてくれるあの村人たちの姿をもう一度見たいからだろう。貧しくとも、いつも静かに笑みを浮かべる彼等。その心の中は大自然に囲まれ、あるがままに生きる心の自然が残っているような気がした。

結核性髄膜炎で寝たきりのペーチャ君をお見舞い

血流が滞留し、下半身不随隣寝たきりの状態となったペーチャ君(24歳)を訪問し、励ましました。ペーチャ君は、大野が民族村を訪問し始めた初期から世話になってきたナナイ族の猟師の長男で、当時はテレビ技術者になりたいなどと控えめに語る内気な青年でした。10代の終わりに発病し、治療が遅れ今日にいたります。2年前の冬、病院を訪ね初めて症状の重大さを目にして、担当医に面会、「血流の滞留を改善できれば硬直した足が動くようになる可能性もある」とロシアにない薬を上げたため、会員の皆さんに寄付を募り、新潟大学医学部の山内医師、ピリム医師、小出町の庭山医師らと慎重に協議、ペーチャ君の担当医とも連絡を取りながら3種類の医薬品を届けました。一時症状の改善に役立ったとの母親の感想をいただき期待しましたが、担当医は「薬が効いているとは判断できない」と答え、今回改めて病院を訪ね、担当医の考えを聞きました。

それによると、脊髄の血液滞留の原因となっている部分が硬化しており、切除手術も検討しなければならないということで、そのためにはMRTの撮影が必要だと、高度医療について言及がありました。今回の面会では、ある公立病院の関係者にも動向をお願いし、寝たきり状態のペーチャ君の状態について観察していただきました。将来的にはぜひ昔のように元気に歩く姿を見たいという気持ちですが、当面座れるようになることが焦眉の課題と考えています。私と同行した病院関係者は「今の第一の課題は、褥瘡対策」と話しています。担当医からは最新の診断書を預かってきました。これまでお世話になった医師の意見を聞きながら、ベストな対応を考えてまいりたいと思います。可能な範囲でご理解ご支援をお願いします。(大野遼)

●鍛冶俊樹氏、ユーラシアンフォーラムでの講演依頼を快諾

9月2日のフォーラム実行委員会に軍事ジャーナリストの鍛冶俊樹氏を招いて意見交換と懇談が行われました。クラブからの参加は7名でした。その結果、現在進行中の「チョムスキー」を主題とした講演と映画上映活動に引き続いて、2003(平成15)年明けの企画として「軍事ジャーナリストから見たユーラシア(仮題)」を演題とした鍛冶氏の講演が実現する運びになりました。

鍛冶氏は、1957年広島県生まれ、83年に埼玉大学教養学部卒業後、航空自衛隊に幹部候補生として入隊。情報通信関係の将校として十年間の勤務を経て一等空尉で退職、評論活動に入りました。95年、「日本の安全保障の現在と未来」で第1回読売論壇新人賞佳作に入選。著書に『エシュロンと情報戦争』(文春新書、2002年)、共著に『小説 東アジア覇権戦争』(ティ・アイ・エス、1999年)、『戦後五十年とこれからの日本』(読売新聞社、1996年)などがあります。

『エシュロンと情報戦争』においては、97年のインドネシアやタイの通貨危機、東チモールの独立、日米貿易「戦争」、などにおいて英米が第二次大戦以来構築してきた地球規模の情報(諜報)網が利用されていたことが指摘されています。

鍛冶氏はかねてよりユーラシア(ないしシルクロード)地域に関心をお持ちで、今後のフォーラムの展開に新たな拡がりができることを期待しています。講演実施の詳細はおってご連絡いたします。(文責:若林一平)

★ 現在ウイグル言語文化塾を開催中です。塾生は4人。ウイグル語のアルファベット32文字と楽しく格闘中です。ウイグル語、ウズベキスタン語、モンゴル語、トルクメニスタン語、アゼルバイジャン語、イラン語、パキスタン語、ロシア語、中国語についても言語文化塾が可能です。各塾とも生徒4~5人で実施します。友人知人をお誘いあわせの上どうぞご相談ください。

★ ユーラシアンクラブのサポート会員募集中!

理解親睦協力を促進するクラブの活動は、無報酬のボランティアスタッフが毎週ミーティングを行い、役割を分担しながら実施されています。活動の拠点となる新宿南口の会議室は、ボランティアスタッフ自身が3千円、5千円、1万円と資金を出し合いながら維持されています。「サポート会員」会費は、年会費1万2千円です。

★ シカチアリヤン村コミュニティ交流キャンプの整備に賛同する寄付が集まりつつあります。サポート委員会で協議しながら、有効に活用させていただきます。ありがとうございました。